修学旅行を通しての現地理解教育

── 日系コロニア（移住地）との交流 ──

前リオ・デ・ジャネイロ日本人学校　校長
大分県豊後大野市立緒方中学校　校長　赤　嶺　照　明

キーワード：現地理解教育，日系コロニアとの交流，ブラジルの産業，日系移民の活躍とブラジル貢献

１．はじめに

本校は，３年サイクルで修学旅行の訪問先を設定している。私が赴任した年は世界遺産の街，オウロプレットとMBR鉄鉱山，２年目（2006年）にサンパウロ州アラサツーバの日系コロニア訪問と姉妹校交流，３年目に首都ブラジリア訪問を実施した。ここに，2年目に実施したサンパウロ州アラサツーバの日系コロニア訪問と姉妹校交流について報告することにする。

アラサツーバはリオ・デ・ジャネイロから凡そ1000㎞離れたサンパウロ州西部の中心都市である。100年前に多くの日本人が一攫千金の夢を見て，サンパウロ州西部のノロエステ地域に移住した。しかし，厳しいコーヒー栽培の契約農民（コロノ）から自立し，多くの日本人は自らジャングルを開拓して農業を営み，ブラジル農業に大きく貢献してきた。このノロエステ地域には多くの日系入植地が点在し，その中心がアラサツーバ市である。本校は，1988年にアラサツーバ日本語普及センター（日本語学校）と姉妹校関係を締結し，３年に１度訪問し，交流を続けている。逆にその翌年，アラサツーバ日本語学校の生徒をホームステイで受け入れている。

２．突然の修学旅行キャンセル～そして旅立ち

修学旅行に出発する前日の午後４時，急遽，苦渋の決断をすることになった。修学旅行の延期である。３日前に発生したサンパウロ州の刑務所の暴動が州内あちこちに広がり，目的地のアラサツーバ郊外の刑務所まで暴動が飛び火していることが分かった。前日のキャンセルに子ども達の落胆と動揺は大きかった。暴動の理由は，収容されている囚人がサッカーのワールドカップドイツ大会をカラーTVで見られることを要求した暴動であり，その理由に何ともいえない怒りを覚えたが，安全には替えられない。

およそ１月半後の７月初旬，３泊４日の修学旅行は好天に恵まれて成功裏に終えることができた。延期のため当初の計画を変更せざるを得なかった。しかし，当初の計画よりゆとりのある旅程となったこと，また，受け入れ先が長期の休みに入ったことから姉妹校交流は一層充実したものになった。

３．アラサツーバ市郊外のダチョウ農園へ

パンタナール航空の小型双発機は１時間遅れでサンパウロのコンゴーニャス空港を飛び立った。晴天に恵まれ，眼下に赤茶色の大地が遙か遠くまで見渡せる。ここはかつて大ジャングルであったのだろうかと思いを馳せながら大サトウキビ農園に囲まれたアラサツーバ空港に到着した。

心地よい気温に感激した。冬であるがサンパウロ市よりもかなり暖かい。空港ロビーで，今回お世話になるアラサツーバの日伯文化協会の会長さん以下役員の方々，日本語普及センターの先生方の出迎えを受けて一安心した。簡単な顔合わせの会を済ませた後，小型バンで前田農園へ向かう。

緩やかにうねった大平原の中，見渡す限り直線の高速道路を小１時間は走ったであろうか。前田農園に到着した。しかし，飛行機が１時間遅れたためにダチョウ農園は十分に時間が取れなかった。それでも前田さんの自宅近くの農園へ案内していただく。鳥取県から派遣された日本語教師の谷口太郎先生が生徒３人を連れて来られており，一

緒に農園へ。ダチョウ園に着くやいなや本校の子どもたちはアリの攻撃を受け，アリ払いに必死であった。当地の子ども達はゴム草履姿で平然としていた。アリにとって本校の子たちが新鮮であったのだろうか？帰りに巨大なダチョウの卵を５個いただき，前田農園を後にした。

４．自給自足のユニークな弓場農場

午後６時，素朴な角笛の合図で弓場農場の夕食が始まった。ビュフェスタイルで各自が好きなだけお皿に盛る。何とこの農場では自給自足の生活が営まれている。美味しいみそ汁，炊き込みご飯，素朴なナスビの煮物，野菜，果物等々，どれをとっても新鮮で大満足であった。

午後８時過ぎ，アリアンサの日系の方々も駆けつけ，弓場を代表するバレエが始まった。一瞬，農作業する小屋かなと思ったが，これが舞台であった。音響や照明が素晴らしい。さっき一緒に夕食を目の前で食べていた人たちが踊っているではないか。モダンなバレエ，日本民謡，入植当時の姿を表す踊りを小１時間見て終わった。老いも若きもそれぞれの持ち場で芸術活動に携わっていることが，弓場の存在を特徴づけているようだ。自信がみなぎっている。

その後，アリアンサの子ども達と本校の子ども達の交流が行われた。長野県派遣の森脇マサコ先生の指導で日語校の子ども達が日本語の歌を披露してくれた。会場の関係でゲーム的なことはできなかったが，お互いに何か心の通じ合うものが感じられた。折角の機会，就寝時間をオーバーしてわざわざ駆けつけてきてくれたアリアンサの子ども達との語らいは続いた。

弓場の朝は早い。薄暗く，ひんやりした朝もやに角笛が響く。学校へ出かける子ども達は６時過ぎには朝食を取り出発する。本校の子ども達も６時過ぎには起床し，朝食を取った。ここで搾った牛乳，炭火で焼くトースト。朝食一つを取ってみても感慨深いものがある。本校の子ども達にとっては貴重な体験である。

朝食が済むと農場体験に出かけた。案内は高校に通っている女子学生であった。彼女がトラクターを運転し，我々は荷台に乗って野菜やグアバ（ゴイアバ）の収穫や椎茸のコマ打ち等を体験した。広大な農園をトラクターに乗って体験できたことは，移民の生活の一面を知る貴重な体験でもあった。

昼食後は，広報部長の矢崎正勝氏に弓場農場の生活や歴史，リオ日学との交流の歴史を聞く機会を設けていただいた。子ども達は，この旅行のねらいの一つである「移民の生活を学ぼう」の一端を整理する機会となった。開拓当時の苦労話は聞けなかったが，移築された北原記念館の当時を忍ばせる粗削りの柱がそれを物語っていた。

５．アラサツーバ日本語学校との交流

３日目はアラサツーバ日伯文化協会の高橋会長が開かれたインディオ博物館を見学した。会長のお父さんが移住して来て，日本語教師をする傍ら収集された貴重なインディオの品々が展示されている。会長さんのご厚意でブラジルのインディオの歴史にふれることができた。

車で30分ほど走ると，チエテ川の河川敷公園に到着し，チエテ川をせき止めて出来たダム湖畔のきれいな公園で日語校との交流が行われた。最高の天気に恵まれ，両校の子ども達は昨夜の出会いからかなり緊張が解かれたようで，表情は生き生きとしていた。アラサツーバ文協のご厚意でシュハスコ（ブラジル式焼き肉）と日本食が振る舞われた。最高のご馳走と和やかなムードのなか談笑は続いた。

午後は，日語校の先生方のリードで交流会が始まった。この日のために練習を積んできたのであろう，見事な出し物に会場は一層盛り上がった。交流会は１時間半ぐらい続いたであろうか，貸し切りの会場で思いっきり活動が

出来た。普段，日本語を使う機会の少ない日語校の子ども達には良い刺激になったようだ。

午後からは気温も上昇し，少し暑かった。保護者のご厚意でチエテ川をボートに乗って遊んだり，釣りやサッカーをしたりして，交流の最後を締めくくった。帰りには，アラサツーバで一大イベントの牛の品評会（農業祭）会場の前日準備を特別に見せていただき，市の産業にもふれることが出来た。

６．エタノール工場と広大なサトウキビ畑見学

最終日は，日語校の生徒と共にサトウキビ工場を見学した。工場そのものは見学できるシステムになっていなかったので，オフィスでビデオによるアルコール工場の説明を視聴した。

その後，担当者の案内でサトウキビ畑へ出かけた。広大な大地に巨大なトラクターが畑を耕し，畝を作っていく。種をまいて育てるのかと思ったら違う。サトウキビの茎をカットして溝に置く。遠くで数人の人夫がナタを振って茎をカットしていた。広大な面積だけに気が遠くなりそうな作業である。労働問題もあり，全てを機械化出来ないらしい。トラクターがその後から土をかぶせていく。

場所を移動して刈り取りの作業を見学した。驚嘆の一言である。高さ３ｍはあろうか，迷い込んだら脱出不可能なサトウキビ畑が広がっている。「ザワワ，ザワワ」という歌のような幻想的な雰囲気とはほど遠い。ここも巨大な刈り取り機，受け取りトラック，運搬トラックが構えて作業が進む。案内のブラジル人の方が耕作機械を止めて間近で刈り取りを見せて下さった。彼の説明によると，近い将来この一帯はサトウキビ畑で埋まるという。それほど期待の持てる産業らしい。同行していただいた日語校の先生によると，公害もあるという。刈り取った後の葉っぱを燃やす煙やススが市街地に入り，公害をもたらすとのことであった。

日本も，原油高騰のあおりを受け，来年からバイオ・エタノールをガソリンに混合させて試験的に使うらしい。地球環境に優しいバイオ・エタノールが代替エネルギーとして，ガソリン混入以外にも活用されれば日本との関係もより深まるのではないかと感じた。ただ，単作産業ではかつてのコーヒー産業の二の舞にならないかと危惧の念は残る。

７．終わりに

この旅行に当たって，子ども達は「自分から進んでふれあいを持とう」「移民の生活を学ぼう」という目標を掲げた。交流，体験，ホームステイありと例年とは違った旅行であった。それだけに彼らも事前学習をしっかり積み，準備をしてきた。結果は大成功であった。リオ・デ・ジャネイロでは体験できないことをたくさん経験でき，実りある旅行となった。

とりわけ，弓場農場やアラサツーバの方々の心温まるもてなしに感謝の言葉もない。この旅を一言でくくれば「伝統の友情」であろう。国籍は違っていても同じ民族の精神構造を強く感じた。本校が存在する限りこの交流が続くことを願う。

なお，この後，私と共に引率した吉川孝信教諭（平成16年度愛知県派遣）は，文化祭の劇で「移民の父」と呼ばれた「上塚周平」を取りあげた。修学旅行の学習を通して学んだ日系移民の歴史を演劇を通して子ども達に学ばせ，この経験を見事に締めくくった。演じた子ども達の胸の中には，この旅行を通して学んだ事が永遠に残るであろう。私の３回の修学旅行の中で最も強力な印象となった。